

# 六 廿 化



9

俳句雑誌りつか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

あ 蟻さんを犬鼻息ではげますよ  
か 鴨川や飛び飛びの飛び涼み客  
と 取り立ての蕃茄のうぶ毛めでにけり  
ん 運命のいたづら蓮の玉に風  
ぼ 棒高跳び短夜はびよーんと曲がり  
う 梅干されなうみその鬘深めるし  
み 湖の夕立カーテンコールかな  
の 野の末に芋葉いやいやおけさかな  
あ 阿波踊明けたる空の眠からず  
お 奥の間の鏡台ちらと夏座敷  
さ 竿先に躍りつき来し女郎蜘蛛  
に にながむしや仁王の乳に蝉の殻

ま マイルス・デイヴィス鳴きして秋の蚊は  
ぎ 義士の墓灼けをり塩味まんぢゅうも  
れ 練乳のとろりとくぼむかき氷  
ざ 笹浸す水くぐらせし茄子の馬  
る 縷紅草ねぢれて紅を尽しけり  
さ さのよいよい踊の月は三日月に  
の のこ太く押し引く氷秋をふと  
こ 子ら泳ぐ声空耳の橋の上  
う 内子まで鮎をつかみに帰るけん  
い いくつでも母には子ども盆ちまき  
ち 小さかり早続きの糸瓜尻  
ろ 路傍からちんちろりんのもう鳴くよ

う 瓜 食 ん で 六 つ 違 ひ の 姉 は 病 み  
く くる ぶ し に 魚 の 当 た っ て ゆ く 夜 振  
し 尻 向 け て 猫 の す り 寄 り 来 る 晚 夏  
ゆ 柚 子 青 く さ う め ん 汁 つゆ の 葉 味 可 な  
う 雲 海 の 底 ぞ な 伊 豫 の 長 濱 は  
み 岬 遙 か 神 かむ 南 なん 山 ざん へ 登 り 来 て  
さ 爽 や か や 「 岬 の 春 」 の 句 集 手 に  
き 胡 瓜 も み 串 焼 鯖 を ほ ぐ し あり  
の 飲 み 干 せ し ラ ム ネ の 瓶 を 持 ち 歩 く  
は は ぐ れ じ と は ぐ れ て 祇 園 祭 可 な  
る 留 守 ぢ や けん 縁 に ほ ほ へ ん 蚊 遣 豚

佐野幸一郎「赤とんぼ海の碧さに紛れざる」(句集『岬の春』)より。

# 夕風の庭木見でゐる端居かな

佐津のぼる

滴りの乾かぬ岩のひかりけり

触れられぬほど神体の岩の灼け

見て見たき蛇の衣脱ぐところかな

祭鱧こころ足る日は早寝して

ゆうかぜのにわきみているはしいかな さつこのぼる

俳句は釣りに例えられる。釣りは「鮒釣りに始まって鮒釣りに終わる」という。この作品は当に鮒釣りの境地。せかせかとするの一生、のんびりするの一生。それぞれの生き方があっていい。この場面のように夕方、涼風の縁側に坐し、庭をぼんやりと見ている。庭を眺めながらもあれこれと波立つ心の巡り。それでは端居の値打ちがない。が、縁側に涼んでいるうちに心が風いで来た。その横に坐してしる読者も同じくしみみ夕風を味わう。この作品、小手先の句でないのが一等。鮒釣りのごとく始めた俳句も鮒釣りに戻ってきた。今俳句の境地を究めつつあるのだ。「祭鱧」の句も。

# その中にふるさとのあるさとのあり蛍の火 市川伊團次

その中にふるさとのあるさとのありほたるのひ いちかわいだんじ

靈園の近き小川の蛍かな  
妻を待つ水陽炎に汗を拭き

この時を源氏蛍のほしいまま  
蛇の首押さへし後は遊びなる

蛍は様々な思い出の代名詞。闇に溶け込むふるさとの津を、蛍が揺り立たす。懐かしいとは言わず、蛍の火の中に故郷が含まれていると言った。ふるさは懐かしく良いところ、というのは思い込み。甘い思い出ばかりでなく、苦い思い出の人もいる。いやな思い出も悲しい出来事も、楽しいことも故郷という言葉に混在。「ふるさは遠きにありて思ふもの」と室生犀星。故郷は遠距離恋愛。遠ざかれば恋しく。近づけばヤマアラシ。じっと蛍の火に目をこらさず主人公はあなたである。

# 雨乞ひの地に打ち伏して終りけり 田尻勝子

過呼吸の解けず分水嶺も梅雨

紫陽花の毬暗闇に浮遊する

暗闇にくちなしの香の動かざる

地底人の吐息あちこち茅萱の穂

あまごいのちにうちふしておわりけり たじりかつこ

夏旱が続くと水不足がおこり、農家にとつては命にかかわる問題。量近、田に水を引く争い（水争ひ）で殺人も。その水不足を解決しようと雨乞いの儀式をする。この行者は地面に額を打ち付けるように祈り伏した。祈りの真剣さが「打ち伏して」に出ている。がどこか滑稽。必死に祈ってますよというジェスチャーにも思えてくる。もうすぐ雨が降るころにしか雨乞いはしないから、雨乞いをしたら雨が降ってきたと驚くにあたらぬ。祈祷師が顔を上げたら額に血が流れていたら、中国・韓国の時代劇そのもの。作者が雨乞いをしているような錯覚におちいる不思議な魅力が漂う句。

雪 卿 集

梅雨入り

松本文一郎

つつじ山無骨な石を借景に  
つと伸びて吊革掴む夏手套  
梅雨入りやひと日遅れの結婚式  
黒南風や点灯試験ヨーソロ  
黒雲の疾さ流れや梅雨の月

ラムネ玉

貝森光洋

カラコロと歎びおりぬラムネ玉  
世の中に背を向け風鈴静かなり  
真夜中に柏手打って蚊を潰す  
行きどまるたび引き返す蝸牛  
箱眼鏡魚の目玉に覗かれる

せつ じゅ しゅう  
雪 樹 集

涼しかり

筒井八重子

金魚鉢中で金魚のはね回る  
金魚たち色とりどりの華やかさ  
金魚たち大口開けて餌をさがす  
金魚らは終日口をぱくぱくと  
明け切らぬ光のカーテン涼しかり

夏 虫

出 口

誠

独り居て草むら照らす蚩かな  
夏虫の落ちては魚に食はれけり  
梅雨空におもちやの音の届きけり  
薄墨の空に流るる梅雨曇  
屋根からの梅雨がパイプを流れ出づ

せつ じゆ しゆう  
雪 樹 集

田 搔 ぎ

藤 生 不 二 男

さざ波を逐うては寄する田搔きかな  
母の日の母の遺影に笑みすこし  
あぢさゐの盛り上がりたる紫紺かな  
湯上りの風のかよへる跣足かな  
案の定雨となりたる溝浚へ

燕 の 子

溝 渕 弘 志

夕立や池の辺りに三輪車  
人稀に通る杣道枇杷実る  
廻り道してまで見たし牡丹咲く  
夏帽子陰を求めて右左  
自宅から駅まで続く蝉時雨

# 蛩雪譚



六甲

二十五年九月号選後に

つつじ山無骨な宿を借景に

松本文一郎

つつじの華やかさと無骨な石を対比。無骨とは、何となく知っているがはつきり説明せよと言われたらでない言葉。さつそく「類語辞典」を引いてみた。「人々について」気品や優雅さがないさま失敬・不行儀・尾籠・無作法・失礼・不作法・武骨・無遠慮・粗野・非礼・伝法・不躰け・慮外・不躰・不仕付け聊爾・無礼・磨きがかけていない、洗練されていない性質・ラフさ・粗っぽさ・荒唐しさ・荒っぽさ 武骨・荒々しさ・荒くれ・粗さ・粗野・粗暴さ・蛮骨荒さ（人または行動について）洗練か技巧に欠けている疎放・ごつい・おおざっぱ・粗鬆・粗野・いけぞんざい・大きっぱ・粗笨・粗大・粗っぽい・粗放・粗雑」と可哀想なくらい罵声を浴びせられている。けつたいやなあと思うのは「無骨」というのまで解説に入れていること。之ほど左様に「無骨」という言葉を解説しなくてもいいだろうと思うほど可笑しい。可笑しいというのは「ちゃんちゃら」という意味。その無骨がつつじ山の華やかな彩りを引き立てているのである。選者は短絡で平凡ながら美女と野獣に即繋がったのである。でも、果たして石が引き立て役であることは逆の見方をすればつつじが無骨な石を引き立てていることでもある。再び選者の我見だが、美女はおそろしいほど男に対する美的感覚に乏しい。

# 六花集

山紀そ床枇 吊雨蛸蛸蛸 え揚豌糜糸  
門州れの杷 し粒壺壺壺 ごげ豆屋つ  
を路ぞ間の ののの の舟のとま  
二青れの木 ぶひ積縄ひと  
つ田の芍に 池らまりすつ  
くを屈薬オ 水交は潮てつ  
ぐ分け託ほン 途す梅匂ひに  
りてにれ色 切れ雨のけけか  
て電車旅出 の袋 しの蝶りりな  
青葉ゆ薄立袋 寺く暑す掛

平  
居  
藩  
子

住  
田  
千  
代  
子

升  
田  
ヤ  
ス  
子